

十二月のテーマ

実践の要点

実践と幸福

丸山竹秋

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所会長・丸山竹秋（一九二一・一九九九）のこゝとばを掲載します。



え・小島サエキチ

と晩たつて、朝起きてみた
ら金持ちになつていたとい

う。土地が売れた。宝くじに当た
つていた。遺産がころがりこんで
きた。その他、何もせず儲けたと、
人から羨ましがられるようなこと
は多い。

「いいことをしやがったなあ」
「うらやましいわねえ」

だが、ほんとうにそうであろう
か。それ相当のすべきことをやり、
働いた結果として当然の成果を得
た場合は、幸福である。しかし、
何もせず、棚からボタモチ式に与
えられた幸福は、まず永続きしな
い。「ただで貰うことほど高くつく
ものはない」という言葉があるが、
勞せずして得た金銭は、身につか
ない。それだけではなく、かえつ
て身をほろぼすものになりかねな
い。土地が道路になり、国や自治
体から多額の金を貰ったりした家
庭で、金銭財産をめぐるトラブル
が続き、不幸のドン底に落ちたと
いうような事実、いくらかも見聞
することができる。

幸福というものは、自分で造り

あげるところに値打ちがある。人
から貰った幸福は、ほんとうの幸
福とはいえない。親から貰った健
康とか、よい性質といったような
ものは、ありがたいにはちがいな
いが、それらを貰っていて「自分
はほんとうに幸福だなあ」といつ
た喜びにひたれるか。

いつも健康な人は健康の幸福を
ほんとうには知らないという。自
分が病気になるとか、人が苦しん
でいるのを見て「気の毒だ。それ
にひきかえて自分は何と幸福なの
だろう」と、あらためて親のあり
がたさが自覚できる。

生まれた時から金持ちであると、
金の尊さ、ありがたさがわからな
いので、ほんとうに幸福とはいえ
ないのだ。

もつと端的にいうと「実践のな
いところには幸福はない」さらに
は「実践せずして救いはない」の
である。通俗的には「額に汗せず
して真の幸福は味わえない」とい
うことだ。

ここにいう実践とは政治的、経
済的、芸術的、学問的、家庭的、

宗教的、倫理的、その他にわたる
自らの実行のことである。

実行も何もしないで政治家とし
ての成功はない。学問もせずに学
者にはなれぬ。ピアノの練習もせ
ずに、ピアノリストにはなれぬ。芸
術の修練をしない芸術家はいない。
また、ろくに信仰心もたずに、
宗教では救われないとこぼす人も
多い。念仏も唱えず、題目もあげ
ず、行も何らしらないで「宗教では
ダメだ」などといっている。

倫理道徳は堅苦しくて苦手であ
るとか、また徳福一致の「倫理」
でも救われなるとか、いい加減な
ことをいう人があるが、そうした
人たちは、いったい何を実践した
のか。親を大切にするとか、配偶
者を心から愛するとか、わが子を
正しくそだてるとか、そうしたこ
とに、どれほどまごころを傾けた
のか。

「いくらやっても」というが、そ
の「いくら」とは何をいうのか。
徳福一致の「倫理」とは、その実
践にこそ意義がある。

（月刊『新世』一九八七年九月号より）